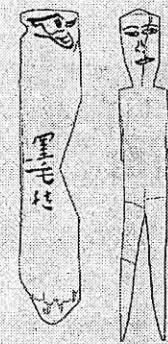


びわこの考湖学

— 第2部 —

5

馬形代と人形代（尾上遺跡）



人面墨書土器（下々塚遺跡）

医学や科学が未成熟であつた古代の人々は、病気や災いは悪靈がもたらすと考えていました。悪靈は身体にたまつた罪や穢れに宿るとき、やがては重病や災難をもたらすものとして畏れられました。

そのため、身体にたまつた罪や穢れを祓うことはとても大切なことでした。

7世紀後半から8世紀初めにかけ、律令体制の確立とともに古墳時代と異なった新しい祭祀形態が出現します。これを受けた国家の平安や王権の安定を目的とするものでした。律令制度が全国に定着していくにしたがい、都の祭祀が地方にも広がっていきました。そこで今回は、地方の

古代信仰の一つである、個々人の死への回避、病の治療、贖罪について出土遺物から考えます。

遺跡で見つかる律令的祭祀遺物には形代、斎申、人面墨書土器、土馬、ミニチュア土器などがあり、役所や集落の井戸、川、溝、池などで多く出土します。特に、琵琶湖の周辺からは多くの祭祀場所や遺物が見つかっています。中でも木製の形代は出土点数が多く、人形や馬、鳥などの動物、刀、剣などの武器、舟、琴、陽物、紡織器、下駄など多岐にわたります。

人形などの律令的祭祀遺物

病氣治癒のために罪や穢れを流す祓えに使われ、「ひとつでひとつ吹き」して自分の穢れを移しました。現在でも幾つかの神社では、紙の人形代や車形代が、病氣や交通事故の予防に利用されています。

竹生島が目の前に浮かぶ湖北町の湖岸に尾上遺跡があります。ここから眺める秋の夕日は竹生島の神々しさを際立たせます。その尾上遺跡から出土した人形と馬形、斎申が出土しています。馬形は長さ1・5センチほどで、薄い板

を型取りして顔を描き、脇部に「黒毛祓」と墨書きしています。馬形は水神の捧げものとされますが、尾上では人間の穢れや疫病を運び去るために馬の形代が使われたものでしょう。尾上遺跡では竹生島を望む湖岸に、斎申で結界された祭場をつくり人々の罪や病、穢れを祓う祀りを行い、人形、馬形、斎申とともに琵琶湖の流れに祓い清める祭りが行われたのです。

また、野洲市下々塚遺跡からは人面墨書き土器が出土しています。土器の表面に墨で喜び、鼻、口が特徴的です。守山市下新川神社に伝わる土器の表面には人面と海□・□幼民の墨書きが記されています。人形が、自分の罪や穢れを移して祓うものであるのにに対して、人面を描いた土器には自分が、自分の罪、穢れ、病を封じ込め祓い、川に流し去ったのだ

と考えられています。古代の信仰は、目に見えない恐れの世界を形代や土器に託し水に流し去ることで、人生の安寧を願ったのです。（財団法人滋賀県文化財保護協会 濱修）

ひとなでひと吹き 穢れを移す

人形の多くは木製で長さ15センチ幅2センチほどの薄い板に頭手足を形取り、顔やヒゲを描きます。人形は、呪い除けや